

11月28日(月)クロスパル高槻に於いて、前東洋製罐(株)専務取締役 ^{そとなり} 甘田外成氏に講演をして頂きました講演内容の要約です。

一言で言うなら高碕翁は、明治から昭和を精一杯(精二杯でも言いすぎでない)生き抜いた高槻人・大阪人・日本人・企業人・国際人で、決して政治家にならなかった人である。

高碕翁の根源的な考え(思想・哲学)は、座右の銘である「守愚」^{しゅぐ}に見られる。知を秘して愚者のごとく振舞うこと。・・・才子才を待み、愚者愚を守る。他日業成るの後、才子才ならず、愚者愚ならず。・・・

1. 農林省水産講習所と青年期(高碕イズムの揺籃・形成期・東洋製缶の源流)

M18年高槻市柱本生。旧制茨木中学の先生から「日本の人口は4千万人、72年後(?)には倍になるが、食料の自給は出来ない。輸入が必至。その為には繊維以外の工業立国」の天啓を受け、自分の生きる道は日本の四海の水産物加工であるとの希望を描き水産講習所に進む。卒業後、三重県の缶詰会社で五年働くが、その時代に鈴木三郎助(味の素創業者)・御木本幸吉真珠王と出会い『一筋の道・一つの仕事、それは水産業・缶詰』とさらに決意を固める。そして日本の遅れた缶詰業に見切りをつけ渡米。5年間にわたるアメリカやメキシコでの技術者としての経験や、フーバー大統領との知遇などが、経営思想の原点になる。

2. 東洋製罐の創設と勃興期(ほとばしる創業時代の情熱)

帰国後、「自分も日本で製罐事業をやりたい」との夢の実現を図り、東洋製罐の設立に奔走する。(大正六年・大阪福島草開町・三十三歳・金の無い徒手空拳で金策に大苦労⇒戦後の無借金経営・額面増資のみで時価増資はしない方針の原点)アメリカで学んだ合理主義の徹底により日本の缶詰業界の近代化を推進し、缶詰規格のサイズ統一と品質の保証・製罐分離を目標とする。

3. 満州重工業副総裁・総裁時代の艱難辛苦(人間愛の愛の真骨頂と外交交渉力)

満州重工業開発会社鮎川総裁の「満州にはいい鉄がある」との誘いで中国に渡るが、満洲重工業に関係するようになる。昭和20年満州の悲劇が始まる。ソ連軍、中共軍、国府軍と支配の変遷があるが、「四千万人の住む満州の産業復興と、百六十万の日本人の内地引揚」これを出来るのは自分しかないとの責任感で行動した。

4. パーシ・電源開発総裁(事業家としての先進魂:勇猛心)

S27年公職追放解除後、吉田首相の意向で電源開発総裁就任を要請される。高碕の専断・独走に非難の声が上がり総裁を辞任するが、岸信介からは「高碕君には地位・権力を求める心は露ほどもなかった」との評価を得る。高碕の人間尊重を現す、御母衣ダムの「莊川桜」は有名である。

献句:甘田外骨・・・一徹の「守愚」^{しゅぐ}を誇るや老桜、大櫻蓋棺事定の高碕翁・・・^{がいかんじてい}

5. 経済企画庁長官・アジアアフリカ会議(卓越して国際感覚・グローバリズム)

バンドンの「アジア・アフリカ会議(S30年・29ヶ国)」に首席代表として出席。「日本はこれからAAと貿易振興へ、AA首脳会話の絶好の機会、アジア人の心は一つの連帯感の良い機会」と強調。

(エピソードとして)東洋製罐のフィジー・タイ・インドネシアへのS40年台からの早い進出は、高碕の遺志を継いだ長男社長の決断、「迷惑をかけた東南アジア諸国の民生向上に協力することは日本の義務。親父の遺志でもある。自分はリスクは覚悟。ただし、社運を揺るがさない範囲。場合によっては個人で負担する覚悟」と私に直接に披歴されたことがある。97年アジア通貨危機でも決して見捨てなかった。

(※紙面制約上、甘田講師の講演内容を十分に伝えることができなく、申し訳ないと思っております。)